

インタビュー

上方文化笑学センター・西上雅章特別顧問に聞く

聞き手：上方文化笑学センター長・文学部 広瀬 依子

上方文化笑学センターは、客員として多くの方々に協力をあおいでいる。

本学 OB で通天閣観光（株）西上雅章会長は本学客員教授であり、センター設立当初から特別顧問としてさまざまな支援をいただいている。西上特別顧問の考える大阪とは、笑いとはどのようなものか。見解をインタビューした。

大学での思い出

追手門学院大学に入学したのは 1970（昭和 45）年です。学生運動真っ盛りで、東大では安田講堂が封鎖されたり入試が中止になったりした時代です。そのようなニュースがよく流れるものですから、当時受験生だった私の進路について、父親が心配しましてね。調べた結果、追手門学院大学を勧められて、入学することができました。

まだ安威キャンパスしかなく、学部も私の在籍する経済学部と心理学部だけでしたから、学生数もそれほど多くなかったですね。

振り返ってみて、追手門学院大学に入って本当によかったと思います。学業はもちろんですが、特に、課外活動のゴルフ部で得たものは大きかったですね。学内の坂を走る練習や、午前 7 時から始まる朝練は大変でしたが、先輩、同級生、後輩に恵まれた楽しい日々でした。同級生たちとは今でも親しく交流しており、年に何度かは皆で会います。家族ぐるみで旅行にも出かけるんですよ。本当にいい大学に入りました。

大阪のシンボル・通天閣

新世界というエリアの中に通天閣があるわけですが、この新世界と通天閣は運命共同体だと思います。誕生は 1912（明治 45）年、生みの親は、大阪商工会議所第七代の会頭・土居通夫さんです。一般庶民が外国に行けない時代に、外国を感じてもらおうということで、世界各国の建物を模して造られました。道路区画も北はパリ、ミナミはアメリカ・ニューヨークを真似ています。だから新世界というわけです。

ただ街は変化、進化していくものです。もともと新世界は三大演芸・映画の街だったんです。東京の浅草、神戸の新開地、そして大阪の新世界です。それがパチンコの街になり、串かつの街になり、今は射的や弓道のお店が増えましたね。僕が子どもの頃は映画が盛んでしたので、洋画・邦画の映画館もたくさんありました。今、通天閣で似顔絵を描いてくれる人がいるのですが、もともと映画の看板を描いていた人なんですよ。

僕の生まれは新世界。ですから、通天閣に見守られて育ったようなものです。東京では江戸っ子と言いますが、僕は新世界っ子。通天閣の東側には天王寺公園と動物園があり、西側に通学していた小学校がありました。そして北側には自宅があり、南側に両親が経営する飲食店がありました。通天閣を中心としたエリアの中で過ごしてきたわけで

す。小学校の友人は新世界で商売をしている家の子も多かったですし、今も残っている人が結構いるんですよ。

ただ、僕自身はまさか通天閣に携わり、後に社長・会長になるとは思っていませんでした。通天閣には紆余曲折がありましてね。1970年代には累積赤字が6000万円ほどという厳しい状態でした。通天閣は建っているけれど財務内容を見ると倒れている、と言われていたぐらいです。その頃はオイルショックや光化学スモッグ等があり、地域環境も悪かったので、通天閣になかなか人が集まらなかったんです。

そこでうちの父親や街の方々が再建に乗り出して、赤字を解消していきました。大阪の文化人である作家の石浜恒夫先生や藤本義一先生、落語家の六代目笑福亭松鶴師匠など、いろいろな方が応援してくださいます、経営が徐々に戻っていきました。

たまたま父親が経営に携わることになったわけですが、その時に父が僕に、いずれ通天閣に関わるのだから早く仕事を覚えた方がいい、と言いましてね。僕は飲食業に従事していましたが、通天閣に入社させてもらったんです。1974年でした。

2003年には社長に就任しました。その時、いちばん初めに考えたのは、高さでは勝てないということです。東京にはスカイツリーがあるし、われわれの近くにはあべのハルカスがある。日本一高いタワーは無理だけれども、日本一おもしろいタワーにしよう。そう考えていろいろな仕掛けをしていったんです。おかげさまでそれが当たりました。金色の展望台や通天閣ロボットを作ったり、いろいろ工夫してきました。最近では、タワースライダーとダイブ&ウォークという、新しいアトラクションが人気をいただいています。客層が変わりました。若い人にかなり来ていただいています。特に土曜・日曜は30分待ちぐらいがザラですね。

このような展開は、工事に携わっていただいている竹中工務店さんからの提案もあります。やはり大阪に本社を置く会社とあって、楽しくおもしろいアイデアをたくさんいただくんです。今の通天閣の社長も若いので、このような提案があるけれどもどうですか、と話を持ってきてくれる。そこで面白いからやろう、となるわけです。

伝統とはリノベーションの積み重ねだと思うんです。古いことは大事ですが、それを守るだけでは結果的には朽ちていく。芸術も芸能も、一般的な文化も同じです。新しい改革が必要だと思います。そういう意味では通天閣が変化していくのは大事なこと。伝統があるから改革もできる。本質は守っていかないといけないけれど、進化は必要です。

笑いとお笑い

いま、上方文化笑学センターの特別顧問をお引き受けしていますが、きっかけは以前学長だった坂井東洋男先生からのご依頼です。初めは客員教授にお誘いいただき、その後、笑学センター（当時・笑学研究所）の特別顧問もお受けしたという流れです。僕は大阪で生まれ育っていますから、笑いにはともと興味はありました。笑うことは健康にいいし、ストレス解消にもなります。

「笑学基礎」という授業も何度か担当させていただき、通天閣を中心としたお話をいたしました。難しかったのは、学生さんとのジェネレーションギャップをどう埋めるかですね。自分が知っていることでも、学生さんにはわからない。『哀愁』というアメリカ映画をヒントに、劇作家の菊田一夫が『君の名は』というラジオドラマを書いたんですよ、と言っても、なかなか通じないですからね。お笑いの芸能人の話をして、夢路いとし・喜味こいしさん、桂文枝さん、六代目笑福亭松鶴さんの話をして、わからない。お互いにわかるのはダウンタウンぐらいでしょうか。

大阪洒落ことばも、そうですね。たとえば『夏の火鉢』。時期外れで誰も手を出さないという意味ですが、若い世代には火鉢がわからない。見たことがないからです。そのあたりの難しさがありました。

昔の商人は笑いをコミュニケーションツールとして利用したんです。特に大阪は商売の街。殿さんがいませんから

横社会です。そこで笑いが盛んになる。東京は武家社会ですから、武士は食わねど高楊枝ではありませんが、本音と建前があります。大阪は本音社会と言えるのではないのでしょうか。家に家風、学校に校風、県民性などがあるように、大阪の街にも独特の文化がありますよね。

京都は着倒れ、大阪は食い倒れという言葉があります。藤本義一先生に教えていただいた話があります。京都は着物文化が発展していて、西陣など着物を作る地域もありますが、気を遣うから「気倒れ」でもあるそうです。大阪は食べる食い倒れもありますが、昔の大阪商人のステイタスは自分で橋を架けること。豪商・淀屋が架けた淀屋橋や、商人・岡田心斎の心斎橋がいい例です。橋の杭は水に浸かっているうちに腐ってくる。それを修理すると大きな費用がかかり、本業が傾く。そういう意味で「杭倒れ」。

ほかにも藤本先生にはいろいろ教えていただきましたね。三途の川を渡るな、というのもありました。「判子押さず、金貸さず、役つかず」。判子を押したりお金を貸したり、仕事をおろそかにして何かの世話をすると家業が傾く、というようなことですね。藤本先生に教えていただいたことがきっかけで、大阪洒落ことばとか大阪文化に、興味関心を持つようになりました。自分でも勉強し始めました。たとえば「二階から目薬」も、ことわざだと思っていたら洒落ことばなんですね。

また、よく言われる笑い話ですが、大阪の人は、刀で斬る真似をされたら、「斬られた」というようなポーズをとる。サービスのスキルが高いのでしょうね。商人の街ですから、相手の方がいつお客様になるかわからない。そういう考えが込み込んでいるから、大阪の人はサービス精神が旺盛なのではないのでしょうか。人にもよるとは思いますが、タクシーに乗る時もそうです。「近いけど心斎橋まで行ってや」というような言い方をする。たとえば東京では「銀座まで」で済んでしまう。ものの言い方がやはり違うのでしょうね。

もともと大阪には船場ことばがあります。ですから、柔らかいことばなんです。泉州ことばや河内ことばがメディアで広く知られるようになったので、大阪のことばは威勢がいいというイメージがつけました。ところが船場ことばは優しい。娘さんたちを「いとさん」「こいさん」と呼ぶのもそうです。「ぼちぼちでんなあ」もありますね。商売はどうですか？ と聞かれた時に大阪の商人は「儲かってまんねん」「あきまへんねん」と言うのはよくないので「ぼちぼちでんなあ」と言うんです。商人の知恵というか、こう言われると誰も嫌な思いをしません。

大阪のこれから

以前、笑学センターの企画でプロの落語家と俳優が出演された「演劇落語」を観ました。今後もプロの方を呼んで実演するというのが、今の学生さんやお客さんにはわかりやすいのではないのでしょうか。若い世代とわれわれ世代とは笑いのツボが違うかもしれません。しかし、プロの力はやはりすごいです。夢路いとし・喜味こいしさん、横山やすし・西川きよしさんのような漫才だけではなく、松竹新喜劇の藤山寛美さんなど、大阪の笑いの芸は本当に面白いと思います。

かつて、新世界花月という寄席がありました。また、通天閣の地下にも寄席がありましたね。どちらも松竹芸能系で、出演されていた方々では横山たかし・ひろしさんが印象に残っていますね。松鶴さんには街を盛り上げるためのアイデアをいただきました。餅つき大会を提案されただけでなく、当日はお越しくださいました。また、お弟子さんの鶴瓶さんと呼んでくださって、通天閣の前にたくさんのお客さんがお越しになり、パニック状態になったこともありました。

通天閣は2024年12月から南海電鉄グループの会社になりました。南海さんのマンパワーと資金力は、通天閣にとっては大きなプラスです。新世界にもプラスになる。僕自身は顧問としてあと1年間、会社に残りますが、南海さんが地域活性化をどんどん進めていってくださるという話を聞いておりますので、とても期待しています。

地域活性化にはナンバー2が頑張らないといけない。東京は首都でありナンバー1です。ナンバー2はやはり大阪なんです。大阪もキタはナンバー1ですけど、ナンバー2の大阪南部が頑張らないと大阪の活性化につながらないと思っています。巨人と阪神みたいなものでしょうか。双発エンジンでなければなりません。

近年、関西国際空港から入国・出国するお客様がとて多いと聞きました。以前は成田空港や羽田空港だったらしいのですが、今はこちらが多い。関西には京都、奈良、神戸、和歌山等の観光地がまとまっています。ピンポイントで人を呼ぶのではなく、エリアで集客することが大事です。ですから大阪近辺は更に伸びていくのではないのでしょうか。長島茂雄が「巨人軍は永久に不滅です」と言ったように、大阪のシンボル・通天閣は永久に不滅です。